

The Hop Step Times

February 2024

The Introduction of GROUP PRESENTATION

(グループプレゼン紹介)

2023年11月中旬から12月上旬にかけて、グループプレゼンでは2024年のカレンダー作成を行った。4チームに分かれ、各チームで2か月ごとのカレンダー6枚を作成し、最終日に発表会が行われた。

作成ルールは、A3の下半分にプリンターで印字したカレンダーの数字部分を配置すること、上半分に手描きの絵を貼り付けること、絵は各月のテーマと季節感を表現すること、画材や道具はほっぷで貸し出されたもののみとすること、などであった。

絵のテーマはくじ引きで決定され、1・2月はかっこいい模様、3・4月はきれいな食べ物、5・6月はかわいい動物、7・8月は色っぽい植物、9・10月は面白い風景、11・12月は上品なアニメ調となった。

12月13日に行われた発表会では、ほっぷ通所者およびスタッフが投票し、各月投票の多かった6枚が2024年に部屋に飾られ、1枚も選ばれなかったチームは2024年新春にかくし芸を披露しなくてはならない罰ゲームが設定されていた。

結果は、各チーム1枚は投票1位となり罰ゲームを逃れることが出来た。投票後には個人の感想を対象チームに伝えるアンケートも行われた。

発表会終了後は、チーム内での振り返りを経て、各チームを対象とした全員参加の振り返りを行い、反省とフィードバックが行われた。

本紙では、あるチームのサブリーダーA氏にインタビューを行い、今

回のワークを振り返っての感想を伺った。伺った感想を以下に示す。

今回は今までで一番想定通りに事が進まないワークだった。開始当初、チームメンバーは他チームと同じ5名と聞いていたが、1名が体調を崩し最初から参加できなかった。それでも絵の得意なリーダーのもと、絵の指導を受けながら進めていけば、何とか6枚が完成できるのではと考えていた。

だが、全部の絵の案が決まりかけたころ、急遽リーダーがほっぷを卒業することとなり、一気に不安が増大した。残された3名で6枚の絵を完成させることは困難であり、提出枚数を減らす案、チームを解体して他のチームに吸収してもらう案などを考え、上司役のスタッフに相談した。

結果、提出枚数を4枚に減らしてもらったことで了承してもらえたが、それでもギリギリ間に合うかどうかという所だった。かくし芸をどうするか等も話題に上がったものの、メンバーが危機感をもって作業にあたった結果、他のチームよりも早めに提出することができ一安心した。

発表会やアンケートでは、おおむね自分たちが想定していた評価通りだったが、自信があった11・12月は季節感が伝わりづらいという評価があったのが意外だった。

作成中でも、チーム全員が良いと思った案が上司には通らずに廃案になってしまったりして、なかなか思い通りにはいかずもやもやを感じる事があった。」



選ばれた6枚のカレンダー

筆者も、なかなか絵の案が決まらなかったり、思い通りの表現ができないなど、不安や焦りを感じる場面が多くストレスがたまる感覚があった。

もっと不安に対する対策やストレスを解消する方法を身に付ける必要があると反省した。

ほっぷ通所者で手描きのカレンダーを作成するという仕事に従事している人はほっぽないと思うが、作成

中に感じる焦りや不安感、もやもや等は仕事で感じるそれに通じるものがある。

仕事のときと同じように行動するのではなく、ほっぷの各プログラムやスタッフとの面談で明らかになった自分の課題を踏まえて、今までの自分とは違う行動にチャレンジするための場として、グループプレゼンを利用できると良いと思う。

後日、A氏に当日の感想を伺った。「プログラム内容が発表された時、愕然とした。走っている時は体力的にきつく、途中で走れなくなってしまった。チーム内のメンバーに申し訳ない気持ちだった。またやりたいかと聞かれたら、やりたくない。」

当日朝、家族へ「今日のお楽しみプログラムはビンゴゲームみたいなものだと思うよ」と言って家を出たA氏。帰宅した時、家族から「余計な(甘い)こと言ってるからだよ」と言い返されたそうだ。

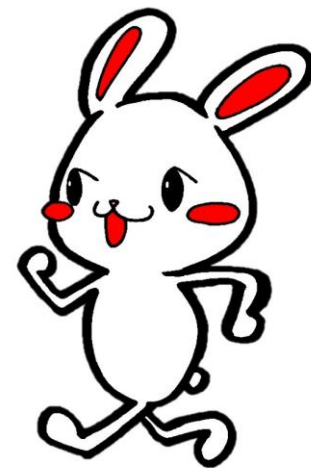
A氏は最後まで走れなかったが、チームとして自分がどのように活躍できるかを考え、自分のできることを精一杯やり、仲間に助けられながらチームとして完走できたことは、非常に良い経験になったと思う。

年末にジョギングなんぞ、と思うことなかれ、こういったプログラムにこそ、職場に復帰、就職したときに役立つ経験が得られるのだ。このような実践の場を提供して下さったスタッフに感謝である。

筆者は、プログラムには一見仕事とは無関係と思うものもあるかもし

れないが、この例のように十分に意義のあるものであることを実感するとともに再認識した。

今後もこの意義を念頭に置き一つ一つのプログラムに取り組んでいくとともに、他のメンバーへ伝えていきたい。



The Introduction of Program

(プログラム紹介)

2023年最終日の午後に行われた「お楽しみプログラム」について紹介する。

午前の終礼時にプログラム内容が発表された。その内容は、「大晦日だよ、正月太りにご用心、無限ジョギングチャレンジ! with研修医」。拍手と笑顔で伝えるスタッフの顔をよそに通所者は沈黙。

静まり返った空気。笑いもなければ、反論すらない。スタッフの説明は続く。「3人でチームとなり院内の芝生広場を1チーム当たり108周回ります。一人あたりの配分はチーム内で決めてください。ジョギングなので皆が同じペースで走りましょう。」

このどんより空気をを経て、午後プログラムがスタートした。午前の大掃除を終え疲れた体にムチを打つ思いで必死に走る。

それぞれが色々な葛藤を経てスタートしたであろう。拍手や「頑張れー」の声援が広場に響き渡る。皆と同じペースで走ることを忘れてしまい、つい自分のペースで先走りしてしまう者、置いて行かれてしまう者。それぞれが自分の癖と向き合いながら走る余裕はあっただろうか。周を重ねるごとに声援が活発となっていた。

しかし、残り3分の1あたりで状況に変化が現れる。メンバーの顔からは笑みが消え、掛ける言葉は少なくなり黙々と走る姿となった。

この沈黙の時間の後、更に変化が現れる。チーム内で「次、自分は+1周走るね」「無理するなよ」等メンバーを思いやる言葉が出始めたのである。こうして全チームが走り切り、労いを掛け合う顔は笑顔で溢れていた。